

## (要旨)

### 近代日中における『紅樓夢』評論の成立 ——小説観の変遷を中心に——

本論は、近代日中『紅樓夢』評論の始まりと考えられる王国維の「紅樓夢評論」と森槐南の「紅樓夢論評」を主な対象として、小説認識の変遷という視点から、近代日中における『紅樓夢』評論の成立過程を考察する。明治＝清末という時代の過渡期に、二つの『紅樓夢』評論の文章が相次いで現れた。王と森は二人とも、中国の伝統的小説観の上に西洋の近代小説理念を吸収し、それぞれ『紅樓夢』批判に応用した。今日まで、王と森の評論を別々に論じる研究は多いが、二人の評論を近代小説認識の変遷という流れに置いて考察するのが本論の特徴である。本論文では、漢文学の伝統を共有する日中両国における中国古典小説を、近代小説観の成立という面から捉えたい。

本論文は、序論、終章を除いて全五章で構成する。

序論では、本論文の問題意識を提示し、『紅樓夢』という小説を紹介した上で、近代日中における『紅樓夢』への評価を略述し、最後に小説という文学ジャンルの形成過程を述べた。

第一章では、清末＝明治期に重点を置いて、近代日中における小説観念の成立過程を考察した。西周の『百学連環』から坪内逍遙の『小説神髓』に至ると、近代観念の導入によって日本における小説観が変化する。一方、清末において、梁啓超は日本を通じて近代的な小説観念を導入し、小説を「文学の最も上乘（最上位）」という位置に上げた。しかし、梁啓超の近代的な小説認識転換は不徹底であり、五四運動の「文学革命」に至って、胡適や劉半農らが、小説の文学としての独立性を認識し、中国における近代的な小説観念転換を完成した。

第二章では、近代的な小説観念が形成された過程を背景に、日中両国における『紅樓夢』評価を考察した。明治日本における『紅樓夢』についての研究はまだ紹介の程度に留まったが、人情をその趣旨として捉えた認識が共通であった。一方、中国では、梁啓超は「新小説」の建設を主張したため、『紅樓夢』を代表とする全ての中国伝統小説を、盗みや淫らなことを教えるものとして批判した。それに反論するために、当時の文人たちは、社会的効用から『紅樓夢』を評価した。しかし、『紅樓夢』の文学独立の価値に対する認識はまだ十分ではなかった。中国古典小説の文学的価値に対する認識は、日本のほうが早いことが明白である。

第三章では、森槐南の「紅樓夢論評」を中心に、その発表された時代を背景とし、彼の『紅樓夢』評価に対する考察を通じて、近代日本における「紅学」の成立を再確認した。「論評」が発表された当時は、坪内逍遙が提唱した近代的な小説観念が形成された頃である。槐南は当時日本で形成された近代的な小説観念を吸収し、それを『紅樓夢』評価に応用した。森槐南は漢学的素養に基づき、幼い頃から『紅樓夢』に触れ、明治期の西洋と漢学の調和の過渡期において、文学界の大背景の下に、坪内逍遙に提唱された小説観から影響を受け、『紅樓夢』という代表的な人情小説を取り上げ、従来の勸善懲惡説を否定し、『紅樓夢』における世態人情や写実の描写に賛嘆した。

第四章では、悲劇の発見という視点から、王国維の「紅樓夢評論」を考察した。王はショーペンハウアーの悲劇論に基づいて『紅樓夢』を「徹頭徹尾の悲劇」、「悲劇中の悲劇」という言葉で評論した。また、彼は『紅樓夢』が、宝玉の自身の意志によって苦痛を体験してから解脱するまでの経歴を描写する物語であると考えた。『紅樓夢』評論は、

ショーペンハウアーの哲学的理論をそのまま当てはめようとしたものではあったが、文学性や芸術性に論及した優れた評論文といえる。このように、王は『紅樓夢』の文学的価値を強調し、『紅樓夢』評論史ないし小説評論史において画期的な論説を残した。

第五章では、王と森が『紅樓夢』を勸善懲惡説から解放したところに着目し、『紅樓夢』批判と勸善懲惡説との関わりを考察した。日本において、江戸期には、『源氏物語』に対する勸善懲惡論や馬琴を代表とする勸善懲惡の小説観が盛んであった。それが、本居宣長や坪内逍遙の批判を通じて次第に衰えていった。一方、中国においても、勸善懲惡的小説観が清朝に至るまで主流であった。『紅樓夢』批評について言えば、紅学評点から梁啓超に至るまで、『紅樓夢』は世人を教化するものとして評論されていた。それは、ある意味で勸善懲惡と共通する小説認識だったと言える。

終章では、序論で述べた問題意識を各章個別の考察を通じてまとめた。即ち、近代日中における小説観の形成期を背景として、王の「紅樓夢評論」と森の「紅樓夢論評」の持つ重要性について確認した。